



令和5年度 学校推薦型選抜
(きのくに教員希望枠) (地域【紀南】推薦枠)

小論文 問題冊子

注 意 事 項

1. 監督者の指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は、次の募集区分の通りである。

「学校教育教員養成課程」
3. 落丁、乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば、すぐに申し出ること。
4. すべての解答用紙に必ず本学の受験番号を記入すること。
5. 解答は、問題番号に対応する解答用紙に記入すること。
6. 記入した解答用紙は、裏返して机上に置くこと。
7. 解答用紙の中の※の欄には記入してはいけない。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たち人類の遠い祖先が、石を道具として使うようになったのは、300 万年以上も前のこと。以来、人類は身近にあるものを利用して、様々な道具をつくり出してきました。石や木を削って槍や斧をつくる。動物の毛皮をまとって寒さから身を守る。土をこねて器をつくる。金属やガラスを加工する——。このように、自然界にある様々な素材を使いこなすことで、人類は、ほかの生き物とはまったく異なる進化を遂げてきたのです。

しかし、これらの天然素材を、たった 100 年で凌駕する新素材が、忽然と現れます。それが、19 世紀に開発が始まり、20 世紀中頃から一気に普及した人工素材、プラスチックでした。

金属よりも軽く、陶器のように割れることも、紙のように破れることもなく、どんな形にもなり、誰でも買える低価格。数えきれない利点をもつプラスチックには、大きな問題点がありました。それは、天然素材と違って、分解されて土に還ることがないこと。(1)人類は、地球環境にとって極めて厄介な物質を発明してしまったのです。

「分解の鍵を突きとめなければ、いつの日か我々はプラスチックの中に埋まってしまうであろう」

これは、1973 年にチェコスロバキア（現在のチェコ）のプラハ美術工芸博物館で開かれた「デザインとプラスチック」展のカタログに書かれた言葉です。いまから半世紀近くも前に、プラスチックがもたらす弊害に、早くも警鐘が鳴らされていたことがわかります。しかし、当時の多くの人々の目には、次々と生み出されるプラスチック製品によって、暮らしが便利になっていくことしか見えていませんでした。

二度目の警鐘が鳴らされたのは、1990 年代初頭のこと。海に流れ出したプラスチック原料を食べた海鳥や、レジ袋をクラゲと間違えて食べたウミガメが、命を落としている——。そんなニュースが、つまり、いまと同じようなニュースが、この頃すでに報じられていたのです。それをきっかけにして、プラスチック業界は、プラスチック原料が海に流れ出ないよう、漏出防止マニュアルを作成します。そしてこの頃から世間では「地球にやさしい暮らし」が合言葉になり、リサイクル熱が高まります。しかし、いつのまにか海の生き物たちのプラスチック被害のことは忘れられていきました。

そしていま、気づけば私たちは、すでにプラスチックの中に埋まっています。

身の回りにはプラスチック製品が溢れ、何かを買えば、平均 12 分でごみ箱行きになるプラスチック製の容器や包装がついてきます。使い捨ての便利さに慣れ、ごみ袋いっぱいのプラスチックごみ、いわゆる「プラごみ」をためては捨て、捨ててはためる生活が、いつしか私たちの当たり前になっていました。

そして再び、海を漂うプラごみの存在が、大きな問題となって私たちに突きつけられています。1990 年代に警鐘が鳴らされたときとは違い、インターネットの普及によって、遠く離れた海で起きていることが身近に感じとれるようになり、私たちは、自分たちの暮らしが海とつながっていることを知りました。世界各地で、海洋ごみ問題への取り組みが始まり、国連も「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げるなかで、海洋汚染の防止や廃棄物の大幅削減を加盟国に呼びかけています。(2)美しい海が、大切な地球が、プラスチックに埋もれてしまわないために、いま私たちは何をしたらよいのでしょうか？

（出典：インフォビジュアル研究所『図解でわかる 14 歳からのプラスチックと環境問題』、太田出版、2019 年 12 月、4-5 ページ。）

- 問1 下線部（1）について、あなたは、子ども達にプラスチックが極めて厄介な物質であることをどのように伝えますか。あなたが教員になったと仮定し、子ども達に伝える際の工夫などを含めて 200 字以内で説明しなさい。
- 問2 下線部（2）について、あなたは、子ども達と一緒にどのような課題を設定し、どのような取り組みを行いますか。300 字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

服装によって外見の差異を解消し統一感を示すことは社会的にはメリットがあっても、個人のレベルでは、なぜみなと同じ服を着なければならないのかというネガティブな感情につながることもあるだろう。学校制服やユニフォーム、リクルートスーツに窮屈さを感じ、個性が発揮できないと不満を持つ人も少なくないかもしれない。

しかし、人為的な区切りがないこともまた、自分が何者なのかというアイデンティティをめぐる不安や恐怖を私たちにもたらす。社会的な境界線を設定することで、私たちはその社会に生きていることを実感し、自己と他者との連続性のなかに、自分が何者であるかのアイデンティティを確信することができるのだ。

日本の学校制服のおよそ百年の歴史は、『ニッポン制服百年史』に詳しい。制服の移り変わりは各時代の世相を映す鏡であるとともに、差異化と同一化の繰り返しでもある。1872（明治5）年の学制発布以来、帝国大学が学生に詰襟式の服装を推奨したことが日本における学校制服の始まりである。女子の洋装制服は、1919（大正8）年の山脇高等女学校が取り入れたワンピース型と、翌年の平安女学院のセーラー服に始まる。和装で通学するのが当たり前だった時代に、詰襟の男子学生や洋装姿の女子学生はモダンで新しい時代のシンボルに映った。特に高等女学校に進む女子の割合が一割に満たなかったこの時代、洋装の制服姿であることは裕福なエリート層の子女であることの証でもあり、そうではない同世代との差異化がはかられていたことになる。

しかし第二次世界大戦後、さまざまな家庭環境の子どもが通うようになると、大量生産により価格の低下が進んだ制服は経済的な服として全国で導入された。誰もが学校に通えるようになると、同世代のあいだでの貧富の差異は無化され、学生というアイデンティティを持つ者として同一化がはかれる。1970～80年代の「ツッパリ」とよばれる学生たちの変形学生服や、1980年代後半以降にブームとなった制服のモデルチェンジは、均質的な学生イメージからの差異化の試みであったといえるだろう。

制服に無個性さを感じ、靴下の長さや袖の折り返し方、タイの結び方など些細な点で、精一杯自分らしさを出した覚えのある人もいるだろう。しかし1990年代、自由を求めて私服を勝ち取った高校生のあいだで「なんちゃって制服」が流行したのは興味深い。服選びのストレス軽減や「女子高生」の価値の高ま

りが理由として挙げられるが、アイデンティティの問題として考えるなら、「なんちゃって制服」の出現は、制服を着ることなしに、自らが高校生であるという確信が持てない不安のあらわれだといえよう。いかに私たちが服によって自己と他者とのあいだに区切りを設けることでアイデンティティを確認しているかが理解されよう。

(出典：蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇千絵編『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ 私と社会と衣服の関係』、「第1部5 アイデンティティ」、フィルムアート社、2022年3月、73-75ページ。なお出題に際し一部を改めた。)

- 問1 日本の学校制服は、服装がアイデンティティを示す役割においてどのように変化してきたと述べられていますか。その内容を100字以内で要約してください。
- 問2 学校制服はアイデンティティを示すうえで一定の役割をもっていると同時に、価格、デザイン、校則や服装指導などの点からさまざまな問題が指摘されています。これからの学校教育における制服について、あなたの考えを400字以内で述べなさい。